

勇払原野、ウトナイ湖の鳥たち

中村 聡

要 旨

多様な自然環境が残る勇払原野には、絶滅のおそれのある種を含む多くの鳥類が生息している。その一角にあるウトナイ湖は、とくに水鳥の渡来地として知られており、日本野鳥の会が1981年に日本で初めてのサンクチュアリとして指定し、その後、1982年に国指定鳥獣保護区(特別保護地区)、1991年にはラムサール条約湿地となった。

サンクチュアリの中心施設、ネイチャーセンターが開設されてからこれまで、レンジャーは約30年間にわたって鳥類調査を行ない、その結果、以下を含め、多くのことが明らかになった。①鳥類は268種が記録され、これは日本鳥類目録(日本鳥学会 2012)にある633種の約42%である、②その大半は渡りをする鳥類である、③ウトナイ湖で確認されるマガンの個体数が年々増加している、④サンクチュアリ内では、シマアオジやアカモズが姿を消し、また、草原や湿原に生息する鳥類の観察頻度が減少し、代わって森林性の鳥類の観察頻度が増加した。

勇払原野、そしてウトナイ湖は工業地帯に位置しながら、鳥類の重要な生息地でもある。当会ウトナイ湖サンクチュアリでは、今後もこの貴重で豊かな自然環境の保全に向け、調査等の活動を進めていく。

1 はじめに

ウトナイ湖は、面積約275ha、周囲約9km、平均水深約0.6mの淡水湖で、石狩湾から太平洋にいたる石狩低地帯南部の勇払原野北西端に位置し、苫小牧市の中心部からは北東に約11kmの距離にある(写真1)。

過去には多くの湖沼が存在した石狩低地帯も、土地利用の進展に伴い、農地や市街地へと変わり、現在は勇払原野にある面積最大のウトナイ湖、それに次ぐ弁天沼などを残すのみとなっている。勇払原野周辺は縄文海進期の今から約6,000年前ま



写真1 ウトナイ湖の全景

で海域であったが、徐々に海岸線が後退し、また、海流の作用により、多くの砂丘が形成された。その過程において、閉ざされた低水域が海跡湖沼としていくつも残り、その一つが現在のウトナイ湖である。

ウトナイ湖周辺の表層には、約4万年前の支笏火山噴火による火砕流堆積物とそれを覆う軽石質の火山灰が、深いところで100mを超える厚さで堆積している。付近の地形は沖積低地と丘陵に大別され、前者には平坦地(氾濫原)湿原や谷湿原が広がる。

勇払原野は、釧路湿原やサロベツ原野とともに、北海道三大原野として並び称され、その面積は過去約60年間でいちじるしく減少したものの、残された多様な自然環境には、絶滅のおそれのある鳥類も多く生息している。

ここでは、勇払原野の中でもとくにウトナイ湖における鳥類相について、その特徴やウトナイ湖サンクチュアリが開設された1981年からの変化などを紹介したい。

2 ウトナイ湖周辺の鳥類相の特徴

2.1 概要

1982年から2011年までの30年間に、ウトナイ

湖で記録された鳥類は268種にのぼる。なかでも、サギ科やカモメ科などの「水鳥」は16科122種が記録されており、これは全確認種の約46%を占める。「水鳥」のうちカモ科に属するのはガン類8種、ハクチョウ類3種、カモ類25種である。

年間で見ると、毎年約140～180種の鳥類が確認されるが、2013年度(2013年4月～2014年3月)は141種であった。このうち、主に水域に生息する鳥類は53種(38%)、主に陸域に生息する鳥類は88種(62%)である。また、1年を通して確認された鳥類は26種(18%)に過ぎず、それ以外の115種(82%)は渡り性の鳥類(渡り鳥)、または年に3回以下の記録しかない稀な種である。

年3回以下の記録しかなかった27種を除くと、渡り鳥88種のうち、主に4月～8月の繁殖期に観察された、いわゆる「夏鳥」は40種(45%)、主に12月～2月の越冬期に確認された「冬鳥」は12種(14%)、主に春と秋のみ確認された「旅鳥」は36種(41%)であった。これらのことから、ウトナイ湖周辺は夏鳥の繁殖地として、また、旅鳥の渡り中継地として利用されていることがわかる。

2013年度に確認された種数の変化を月別に見ると、図1に示すとおり、5月が89種でもっとも多く、次いで10月の81種、4月の77種であった。これらの月は、夏鳥・冬鳥・旅鳥と、さまざまなタイプの渡り鳥が同時期に記録されるためである。

2.2 水域の鳥類

主に水域に生息する鳥類についてみてみよう。当サンクチュアリでは毎月2回～3回、水鳥の全域カウント調査を行っている。2013年度に「水鳥」の種数がかっとも多かったのは10月下旬の21種、次いで11月上旬の20種、3月下旬の18種と続く。これは、越冬地の本州以南へ向かう途中の秋、あるいは繁殖地へ向かう途中の春に立ち寄るカモ科の鳥類が多いためであり、冬を越すのはオ

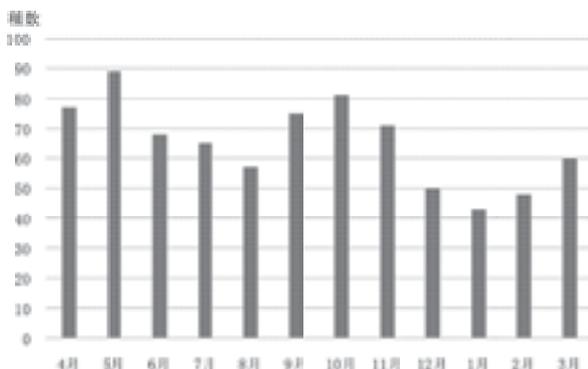


図1 2013年度にウトナイ湖で確認された鳥類の月別種数

オハクチョウ・オナガガモ・ホオジロガモ・ミコアイサ(写真5-F)などわずかである。また、繁殖する種も少なく、マガモとカルガモしかいない。

一方、個体数は12月上旬が最多で約3,700羽となった。この年はマガンの大きな群れが遅くまで滞在したためと考えられる。また、8月中旬に約650羽、2月中旬に約360羽と、比較的多い数を記録しているが、これはそれぞれ、ウミネコとマガモの群れが確認されたためである。

次に、代表的な水鳥について紹介する。

ガン類

ウトナイ湖を代表する水鳥、ガン類について紹介しよう。ロシアで繁殖を終えたヒシクイとマガンが湖で初確認(以下、「初認」)されるのは、例年9月中旬～下旬である。2014年はそれぞれ9月11日、9月21日であった。ヒシクイの方が先に記録される傾向にあり、亜種オオヒシクイも渡来する。例年、初認日から約1ヶ月後に秋の渡りのピークを迎え、マガンが最大で数千羽、ヒシクイが千羽程度となる。

秋のガン類は、写真2のように、採食や羽を休める場所として湖を利用している。未確認ながら別の場所にねぐらをとるようで、ウトナイ湖には午前9時～10時頃に飛来した後、南西部の浅瀬で休み、午後3時頃になると湖の中央部から飛び去ることが多い。日中に湖でじっくりと観察することができるため、シジュウカラガンやサカツラガンなどを群れの中に探すのも、また、カウント調査も春季に比べて容易となる。標識個体の発見も秋が多く、2011年11月30日には青色の首環(C49)を付けたマガンを確認(装着されたのは2005年10月、宮島沼)している。ガン類は湖とねぐらとを行き来しながらしばらく滞在し、例年だと12月、湖の結氷とともに本州または道南地方の一部へと渡っていき、姿が見られなくなる。

宮城県などで越冬したガンたちが再び湖を訪れ



写真2 ウトナイ湖で採食するなど、羽を休めるガン類

るのは、湖の氷がとけ始める3月である。2014年の初認は、マガンが3月2日、ヒシクイが3月16日であった。秋に比べ春は数が多く、同年3月29日には過去最多の「107,000羽以上」を記録した。図2に示すとおり、特にマガンは近年、全国的にも数が増加しており、当地でも同様の傾向が見られる。渡りのピークは例年3月下旬で、その後、4月中旬まで続く。

春は秋と異なり、湖をめぐらして利用するため、日中に湖で姿を見ることは少ない。周辺の田畑へ向けて採食に出かける早朝、湖に戻って来る夕暮れ時が観察と個体数調査の時間になる。赤く染まる空に多くのガンたちが飛ぶ、壮大な光景を見ることができるのだ。当サンクチュアリでは毎年3月に、ウトナイ湖がガン類の生息地として重要であることや保全の必要性を知っていただこうと、観察会や写真展などを開催している。

上述のとおり、秋のガン類は例年だと湖が結氷する12月には飛去してしまうが、近年、周辺の新ひだか町静内や伊達市などでは越冬しており、ウトナイ湖でも2006年～2007年のシーズンに冬を越したことが確認されている。近い将来は毎冬記録されるようになるかも知れない。雪が少なく採食できること、ねぐらとする場所が凍らないことなどが越冬の条件と考えられるが、どうだろうか。個体数の増加や越冬地の拡大は地球温暖化の影響とも考えられ、今後の動向に注目したい。

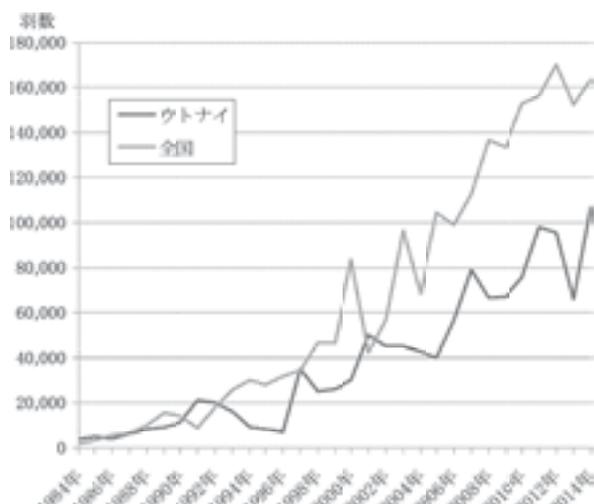


図2 ウトナイ湖と全国におけるマガンの個体数の最近30年間の変動
ウトナイ湖のデータ（ガン類）はサンクチュアリの定期カウント調査（3月）による。全国のデータ（マガン）は環境省のガンカモ類生息調査（1月）の結果（http://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html）による。

ハクチョウ類

日本でこれまで記録されたハクチョウ類は、ナキハクチョウ・コブハクチョウ・オオハクチョウ・コハクチョウの4種である（日本鳥学会 2012）。ウトナイ湖においては、ナキハクチョウを除く3種が記録されており、オオハクチョウとコハクチョウ（写真3）は秋に南下する途中、ウトナイ湖を訪れ、春に北上する途中に再来する。オオハクチョウは一部が越冬し、また、羽にケガを負うなどして飛べなくなった個体が数羽越冬するため、じつは1年を通して湖面に姿が見られる。コブハクチョウは道南の大沼で飼育下にあった7羽が1977年に当地に飛来し、その後繁殖して増えたもので、本来生息する野生種ではない。

オオハクチョウの2013年春における最終確認（以下、「終認」）は5月5日で、前年より14日遅い記録となった。秋における初認は10月8日で、前年と同日であった。上述のとおり、ウトナイ湖で越冬する個体もいるため、この終認日および初認日については、幼鳥が確認されることなどの条件により判断している。期間中に確認された最大個体数は、12月5日の129羽で、越冬数は20～60羽で推移した。前年同期の10～30羽と比べ個体数が多く、前々年の10～63羽での推移とほぼ同じ傾向といえる。なお、越冬個体のうち、1ペアが2008年まで6年連続で繁殖した記録がある。2013年6月にも1羽のヒナを連れた親子が確認されたが、その後は成鳥のみとなったため、繁殖は失敗したものと思われる。

コハクチョウは春と秋に記録され、例年は越冬しない。2013年春における初認は3月20日で、前年より2日早かった。その後は同年5月1日を最後に見られなくなった。同年秋の初認は前年より5日早い10月2日であった。期間中の最大個体数は10月9日の310羽であり、その後12月21日が終認となった。この日以降、次年の春まで記録が



写真3 湖で羽を休めるコハクチョウ

なかったため、この年も越冬はなかったと考えられる。なお、2014年春は、3月19日が初認となった。

2013年度のガンカモ類の生息調査結果（環境省2014年4月発表）によると、全国でオオハクチョウ32,166羽、コハクチョウ37,154羽、種不明ハクチョウ1,188羽、その他271羽（コブハクチョウ256羽、アメリカコハクチョウ15羽）、合計70,779羽のハクチョウ類が記録されている。ウトナイ湖でこのシーズン記録された最大個体数はオオハクチョウが141羽、コハクチョウが280羽であること、ウトナイ湖がハクチョウ類の渡りにおいてコース上にあることから、実際にはかなりの個体数がウトナイ湖を利用していると推察される。

なお、道南の大沼から渡来後に野生化したコブハクチョウの個体数は、図3に示すとおり、1987年には約90羽まで増加したが、その後は急激に減少している。2013年度は10月17日に最大個体数15羽が観察されたが、幼鳥は含まれていない。巣および卵の総数の年変化と個体数の年変化は一致しており、繁殖率は低下している。他のハクチョウ類と異なり、本来の生息地域（中央アジアやヨーロッパなど）との個体レベルの交流がなく、血縁関係にあるものが繁殖を繰り返している可能性があること、初期に繁殖していた個体が高齢化していることなどが原因と考えられる。また、コブハクチョウの採食によりヒシ群落が減少したという推測もあり、湖内の植物の生育や同じ環境で繁殖する鳥類への影響が懸念されるため、その動向には今後も注意しなければならない。ただし、現在の生息状況から見て、個体数が今後増加する可能性は極めて少ないだろう。

2.3 陸域の鳥類

陸域に生息する鳥類についてみてみよう。ウトナイ湖の代表的な自然環境である湿原（写真4）や草原で、繁殖する夏鳥が初認されるのは毎年4月。2014年は、ノビタキが12日で一番乗りし、続

いてオオジュリンが18日、オオジシギが19日であった。5月に入り、ノゴマとシマセンニュウを18日、カッコウを25日に確認した。例年どおり、しんがりはエゾセンニュウが務め、29日だった。6月は、これら夏鳥の美しいさえずりが聞かれる。

湖周辺の林では、春から夏にかけて、ツツドリ・クロツグミ・アカハラ・ヤブサメなどが観察される。当サンクチュアリでは繁殖期に鳥類のラインセンサス（予め設定したコースを歩きながら、目視や鳴き声によって野鳥の種や個体数を把握する調査方法）を行ない、森林環境をモニタリングしているが、2014年の調査で出現率と優占率が高かったのは、上位からセンダイムシクイ・アオジ・シジュウカラであった。湿原や草原ばかりでなく、林においてもこの季節はさえずりで賑やかになる。

10月に入ると、ほとんどの夏鳥たちはいつの間にか姿を消す。そして、アトリやツグミなどの冬鳥が渡って来るまでは、ハシブトガラなどのカラ類、エナガやゴジュウカラ、コゲラやアカゲラといった、おなじみの顔ぶれのみとなる。厳冬期に継続して見られる冬鳥は意外と少ない。マヒワ、年によってはベニヒワの群れがハンノキの実にぶら下がり、ほじってタネを食べる様子が観察される。

近年は、湖周辺でキジバトの越冬が記録されるようになった。今後、北海道では夏鳥のモズやメ



写真4 ウトナイ湖の代表的な自然環境である湿原

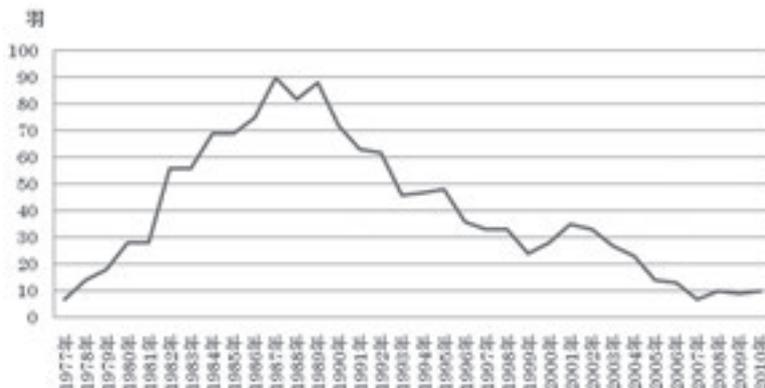


図3 ウトナイ湖におけるコブハクチョウの過去34年間の個体数変動

ジロなども「夏鳥」でなくなり、1年じゅう見られるようになるかも知れない。地球温暖化との関係も推察されるなか、これらについてもマガン同様、今後の動向に注目していきたい。

次に、草原性の鳥類のうち、減少のいちじるしい種について紹介する。

シマアオジ

シマアオジは、ウトナイ湖の草原環境を代表する夏鳥であった(写真5-A)。日本では、北海道のみで繁殖する(東北地方での確認例もある)が、1990年代前半から全道的に減少し、道東をはじめ、まったく見られない地域がほとんどになってしまった。

当サンクチュアリでは、当会レンジャーの勤務日に確認された鳥類を記録している。シマアオジは、図4に示すとおり、ウトナイ湖でも1997年までは観察頻度(勤務日の全日数に対する確認日数の比率)が約60%あったが、翌年以降はいちじるしく減少した。ネイチャーセンターの建つ北岸では、2004年から生息を確認できず、南東部の湿原でも2009年の調査では確認したものの、2012年には出現せず、以来、記録が途絶えている。

シマアオジは2006年の環境省レッドリストの見直しにより、「準絶滅危惧」から「絶滅危惧ⅠA類」となった。これは、タンチョウやオジロワシよりもさらに上、シマフクロウやヤンバルクイナと同等に「絶滅のおそれのある」種であることを意味する。

以前にシマアオジが確認されていた地域は、い

ずれも湿地の周辺部に出現する比較的丈の低い草原や灌木の混じる草原であった。個体数の減少については、繁殖地や越冬地の環境変化、渡りの中継地での捕獲など、さまざまな要因が推測されているが、本種の生息環境の選択性を明らかにし、その環境を保全していくことが必要であると考えられる。

アカモズ

アカモズもまた、絶滅のおそれのある種である(写真5-B)。シマアオジ同様、2006年の環境省レッドリストの見直しにより、「準絶滅危惧」から「絶滅危惧ⅠB類」となった。本種は北海道や本州北・中部では夏鳥として繁殖し、本州南西部や九州の一部でもまれに繁殖する。開けた林、木が疎生する草原や林縁に生息し、北海道や本州では低地にも生息する。(日本鳥学会 2012)

図5に示すとおり、ウトナイ湖では1985年までは観察頻度(確認日数/全日数)が50%以上であったが、翌年から減少し、1994年以降はほぼ観察することはできなくなった。本種も、個体数が減少した原因については明らかになっていない。

3 ウトナイ湖周辺の鳥類相の変化

3.1 観察頻度からみた変化

日本野鳥の会(2007)にある「ウトナイ湖サンクチュアリにおける鳥類相と環境の変化に関する研究」では、1982~2005年度に確認された鳥類266種について、中村・中村(1995)と藤巻(2000)



図4 ウトナイ湖におけるシマアオジの過去30年間の観察頻度



図5 ウトナイ湖におけるアカモズの過去30年間の観察頻度

写真5 ウトナイ湖の鳥たち



A. ウトナイ湖の草原環境を代表する夏鳥であったシマアオジ



B. 絶滅のおそれのあるアカモズ



C. 草原性の鳥 オオジュリン



D. 森林性の鳥 キビタキ



E. 森林性の鳥 センダイムシクイ



F. 冬に飛来するミコアイサ

を参考に生息環境を区分し、鳥類相の変化を検討している。ここでは2006年度以降、2012年度までのデータを加え、さらに検討を進める(図6)。

湿地性の鳥類(湿地と湿地周辺に生息する種)を1982年度と2012年度で比較した場合、種数で24種、割合で約8ポイント減少しており、草原性の鳥類は種数で8種、割合で約3ポイント減少している。一方で、森林性の鳥類(森林と森林周辺に生息する種)は種数で6種、割合でも約9ポイント増加している。

次に、草原性鳥類の代表としてホオアカとオオジュリン(図7、写真5-C)、また、森林性鳥類の代表としてキビタキとセンダイムシクイ(図8、写真5-D・E)の4種について、それらの繁殖期の観察頻度の推移を示す。

草原性の鳥類については、ホオアカが2006年以降、観察される頻度が10%を下回るようになり、オオジュリンも同様に2004年以降、50%に届かない年が多くなった。両種ともに観察頻度は減少している。一方、森林性の鳥類については、いずれも増加傾向がみられた。キビタキは2000年から観察頻度が50%を越えるようになり、センダイムシクイも2000年以降、80%以上という頻度で確認されるようになった。

3.2 センサス結果にみる変化

前出の研究報告(日本野鳥の会 2007)には、ウトナイ湖の代表的な環境である草原と湿原にお

いて、鳥類の生息状況をモニタリングするため、1985年度から約20年間にわたり行なわれてきたラインセンサスの結果がある。

草原環境の調査は、図9に示すとおり、「イソシギの小径」から「湖岸の観察小屋」、さらに美々川流入部方向に進んだ全長500mのBルートで1985~2005年度に、美々川流入部へ向かう全長1kmのCルートでは1994~2005年度に行われた。Bルートでは2007年度の時点で、ホザキシモツケやエゾノコリンゴなどの高茎草本や灌木が目につき、また、Cルートでもホザキシモツケやヤナギ類の灌木が目につくようになっていたようだ。

この報告によると、Bルートでは、1994年からすでに草原性の鳥類が生息密度、優占度ともに減少の傾向にあった。Cルートでは、2005年においても生息密度が1haあたり約1.5羽と、1994年

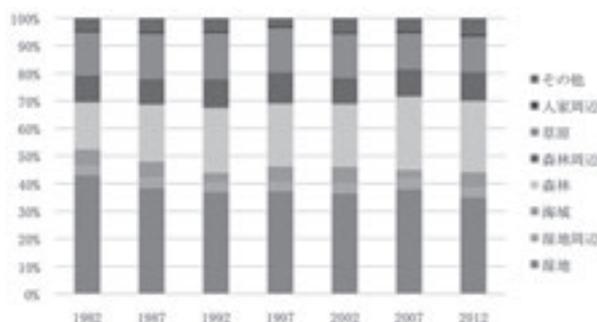


図6 ウトナイ湖で確認された鳥類の生息環境別の種数変化(1982年~2012年のうち7年分のデータ:比率)



図7 ウトナイ湖における草原性鳥類(ホオアカ・オオジュリン)の観察頻度の過去30年間の変化



図8 ウトナイ湖における森林性鳥類（キビタキ・センダイムシクイ）の観察頻度の過去30年間の変化



図9 ウトナイ湖周辺での鳥類ラインセンサスのコース

とあまり変わらない一方、優占度は1999年の約80%から2005年の約20%へと減少している。

湿原環境の調査ルート（ルートD）は、図9に示すとおり、ウトナイ湖の南東部に位置する場所で、全長は1 km であり、ここはヨシ原やイネ科の湿生草本が優占している。南東部湿原での調査は1994年から2005年まで5回行なっており、2007年の研究報告ではその結果が検討されているが、ここでは、その後2006年・2009年・2012年にそれぞれ行なった調査のデータを加えた。これによると、図10に示すとおり、草原性鳥類の生息密度は、1994年から2012年の間、1 ha あたり2～3羽と変わらない一方、優占度は2004年を除く1994年以降、減少傾向にある。

3.3 植生変化と鳥類相との相関関係

前出の研究報告では、草原環境の植生と鳥類相との相関関係を検討している。1984年・1992年・2002年に行われた植生調査の結果をみると、草原環境である「イソシギの小径」に代表的な湿生草本のヨシは、1992年以降は減少がいちじるしい。これに対し、灌木類のホザキシモツケや低木のエゾノコリンゴは増加が目につく。また、湿生草本・乾生草本・灌木類・低木・高木に類型分けして検討されている植生は、1984年以降の約20年間で草本から灌木類や低木などへ移行する傾向がみられる。

植生と鳥類相の相関関係をみるため、植生調査の実施年前後に行った鳥類調査を抽出し、出現した草原性鳥類の優占度について検討している。これによると、ヨシや草本類が植生の40%以上であった1984年の翌年に行われたラインセンサスで、草原性鳥類は7種が確認され、全体の約60%を占めた。1992年の調査では、灌木であるホザキシモツケの増加がみられ、同年に行われたセンサスで草原性鳥類は4種しか確認できず、優占度も約40%と低下していた。2002年の調査ではヨシの激減がみられ、草原性鳥類の優占度は約30%とさらに減少した。また、「イソシギの小径」で、シマアオジやオオジュリンは1992年には確認されたが、2002年には見られなくなっている。両種ともヨシなど湿った草本類が優占する環境に生息しているため、植生の変化に影響を受けた可能性が高いことが、この研究報告では示唆されている。

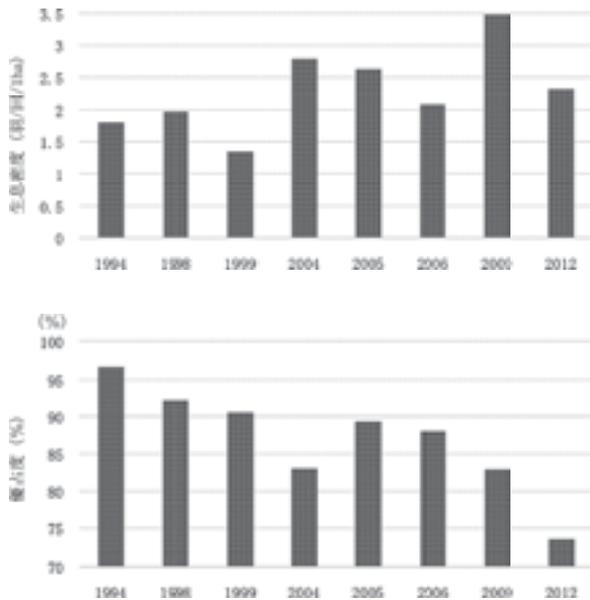


図 10 ウトナイ湖南東部湿原における草原性鳥類の生息密度 (上) と優占度 (下)

4 おわりに —野鳥の生息地を守る—

ウトナイ湖でこれまでに確認された鳥類は「268種」。この数は、日本鳥類目録(日本鳥学会 2012)にある 633 種の約 42% を占める。鳥類は、種によって主とする生息地が異なるため、一般的には、その地域に多様な環境があればあるほど、出現する鳥類の種数も多くなる。つまり、種数の多さは地域の自然環境の多様性を示すものといえる。生息環境別にみると、ウトナイ湖では湿地をはじめ、森林や草原にすむ鳥類が偏りなく記録されており、その自然環境の多様性は特筆すべき豊かさであることが改めてわかる。

日本野鳥の会は、1970 年代後半に自然保護や環境教育の拠点となる「サンクチュアリ」をつくらうという運動を開始し、その第 1 号をウトナイ湖に決め、1981 年にネイチャーセンターが開館した。510 ha のウトナイ湖サンクチュアリは、翌 1982 年に国指定鳥獣保護区(特別保護地区)、1991 年に日本で 4 番目のラムサール条約湿地となった。ウトナイ湖に第 1 号のサンクチュアリが誕生したのも、鳥類の多さや自然環境の豊かさがその理由の一つであったことは間違いない。

しかし、豊かと思えたウトナイ湖の自然環境も近年変化しつつある。草原に生息する鳥類、例えば、ホオアカやオオジュリンは減少し、シマアオジは姿を消した。一方で、森林性の鳥類の観察頻度が増えている。上述のとおり、ウトナイ湖北岸における植生調査の結果からも、湖周辺でヨシ等

の湿生草本が減った一方で、ホザキシモツケなどの灌木、ズミ・エゾノコリンゴ・ハンノキなどの低木が増え、森林化しつつあることが示唆されている。鳥類の減少について、その原因を科学的に明らかにするのは難しいが、第 2 のシマアオジが出現しないよう、絶滅のおそれのある種については、さらに詳細な生息状況調査を行い、その生息環境を十分に把握した上で、保全に向けた策を講じることが重要である。

現在のウトナイ湖が抱える問題や課題は他にも、流入水量の減少とそれに伴う湿原の乾燥化、市街地に近いことに起因する周辺環境の改変(宅地や工場造成など)、外来種(アライグマやアワダチソウ類など)の侵入と拡大など、さまざまである。ウトナイ湖へ流れ込む美々川流域では現在、北海道による自然再生事業も進行しているが、自然環境保全地域指定など、何らかの法的対策も望まれる。

また、日本野鳥の会は近年、ウトナイ湖の南西部に位置する弁天沼を含む勇払原野の、貴重で豊かな自然環境の保全に向け、希少鳥類の生息状況調査などを進めている。勇払原野はウトナイ湖同様、春と秋には水鳥が立ち寄り、夏鳥の繁殖地としても重要な湿地である。北海道三大原野の一つに数えられ、日本の重要湿地 500 にも挙げられている。なかでも苫小牧東部開発地域(苫東地域)は工業用地でありながら、工場の立地が長年進まなかったため、台地・砂丘・湿原・湖沼などで形成された複雑な自然環境が現存している。千歳川大規模放水路に代わる治水対策として、河道内調整地(遊水地)計画が進むなかで、貴重な植物が見られ、絶滅のおそれのあるアカモズなどが生息する残された場所でもある。現在は、特定猟具使用禁止区域指定のみであるため、なんとか鳥獣保護区に、と保全活動に取り組んでいるところである。

引用文献

- 藤巻裕蔵(2000)北海道鳥類目録 改訂 2 版. 帯広畜産大学野生動物管理学研究室.
- 中村登流・中村雅彦(1995)原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 保育社, 301 pp.
- 日本鳥学会目録編集委員会(2012)日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥類学会, 438 pp.
- 日本野鳥の会(2007)2006 年度ウトナイ湖サンクチュアリ年次報告書. 79 pp.

中村 聡 (なかむら さとし)

公益財団法人日本野鳥の会 保全プロジェクト推進室に所属。ウトナイ湖サンクチュアリ担当のレンジャーとして 2007 年に着任。当会直営のネイチャーセンター、および苫小牧市から業務を受託している野生鳥獣保護センターで、環境調査や環境教育、広報などに従事している。